クリスチャン・フェーリクス・ヴァイセの児童演劇にみる作劇法

小　林　英起子

【キーワード】クリスチャン・フェーリクス・ヴァイセ、児童演劇、「子どもの友」、作劇法、感動喜劇

序

ドイツ啓蒙時代後期の1760年代、クリスチャン・フェーリクス・ヴァイセはレッシングの喜劇作品の隙間を埋めるかのように、『アマーリア』（1765）や『策略には策略を』（1767）、『試される友情』（1767）などの喜劇を著わし、人気劇作家としてその名が広まっていた。その作風の特徴は感動的なセリフの応酬で観客を涙もろくさせる感動喜劇にある。1770年代の中頃からヴァイセは児童向けの雑誌「子どもの友」の編集と発行に携わり、週に２，３号も発行するほど精力的な創作活動を行なっていた。その雑誌の折々の号で、ヴァイセは子どものいる家庭における日常の出来事を描いた児童演劇を Lustspiel für Kinder, Schauspiel für Kinder として著わしていた。４，５歳から14，15歳程度の子どもの世界を描く児童演劇は、当時のドイツではまだ珍しいジャンルであり、これまでヴァイセの児童演劇は研究されることが少なかった。

本稿では24ある彼の児童演劇のうちから、1770年代の代表的な作品を扱い、多作とされるヴァイセの劇作法の特徴を分析し、児童演劇の独自の魅力ならびに今日における意義について考察してみよう。[1]

１．ヴァイセの児童演劇の形式、舞台設定

ヴァイセの児童演劇では一幕物７～13場ほどの小劇が多い。とりわけ４～５歳の子ども向けの話では場の数も少なく、一つのエピソードが展開したところで結末を迎える。しかしながら10代後半の年長の子ども向けの話では、二幕物となり、複数のエピソードが絡み、親子が交わす対話の場面では、深刻な内容も出てくる。

登場人物は両親とその子ども達２，３人と下僕や下女、およびよその家の子ども達であることが多い。核家族が中心で、祖父母は出てこない。父親の身分・職業は、地主貴族や田舎貴族、ユンカー、富裕な商人、豪農、あるいは軍人、牧師、音楽家などである。普通の庶民の家が舞台というわけではない。富裕層の屋敷の広間や客間、子ども部屋、父親の書斎、領主の家の庭や畑、東屋、野外の庭園、遊歩庭園、森の中などが舞台である。ヴァイセは自分の幼い娘に読み聞かせ

るつもりで「子どもの友」を創刊し、作品の執筆にあたったという。しかしながら号がすすむにつれて、自分の子どもも成長することで、時折、14，15歳の兄弟姉妹が登場する劇も書いて、子どもの対象年齢を広げている。

多くの場合、父親や母親が外出して留守の間に、子ども達の間で騒動が起こる設定になっている。いたずらや事件が展開して、子どもが窮地に陥った時、たいていの場合、父親が、あるいは母親が帰宅して子どもを危機から救い出す、というストーリー展開をみせる。子ども達から事情を聴いた王子が後で父王に伝え、子どもの父親の大尉の帰還を取り計らう場合もある。また、ヴァイセの劇にあっては、劇の鍵を握る出来事や伏線が冒頭部ですでに観客に種明かしがされていることが多い。

2．歌と音楽

「子どもの友」には折々に歌が挿入されており、楽譜まで掲載されている号がある。ヴァイセは子ども向け文学では音楽の活用を重視していた。ヴァイセの寓話でも時折、詩にメロディーがつけられている。また、大人向けの劇でも彼は舞台で演劇と歌を披露するジングシュピールをすでにいくつか手がけていた。こうした背景から、児童演劇においても歌の場面が見られることがある。

例えば『いい気味』(1776) においては、ユルヒェンがナッツのつまみ食いをしながら歌う。カールも姉をこらしめようとして調子にのって歌をうたう。いたずらの場面を面白く見せるために、歌の場面は効果的である。さらに父親がカールにおしおきを与える際にも歌が使われている。幼い観客が舞台上のおしおきの意味をあまり深刻に受けとめて怖がらないように配慮されたのかもしれない。ヴァイセの児童演劇の基調には喜劇があると私は考える。

『躾の悪い男の子』(1777) でもバイオリン弾きの少年が登場する８場で歌の場面がある。子ども達だけのテーブルで、コーヒーやケーキがふるまわれた後は、余興の場になっている。バイオリンの音楽に合わせて子ども達がダンスをし、パーティーが盛り上がっていく。音楽の効果で心理描写や臨場感が巧みに演出されている。

3．子どもの躾といたずら

ヴァイセの児童演劇では、創刊当初、幼少期の兄弟姉妹の家庭でのエピソードを中心にして、そこに遊びにきた友達が加わる構図がある。上流階級の家では、子ども達の側に使用人である下僕や下女がついているが、子ども達は大人の隙をついて子ども達の世界を作り、いたずらに興じていくうちに、危機を招く。

例えば喜劇『クリスマスの贈り物』(1776) では、ドルヒェンがクリスマスにもらった帽子を手にして鏡の前であれこれ表情を作るうちに、大人の気分になり、おませな独り言をつぶやく。

お手伝いにそれを立ち聞きされ、姉や妹によってからかわれて気分を損ねてしまう。母親に代わって、お手伝いが姉妹の作法について忠告するという、日常のささいなエピソードを描く小劇である。

グーファナンテ：(...) ―本当のことを言いますと、お嬢様方は大変お行儀が悪いですわ。私の年のせいとはいえ、うやうやしくしてもね...
フリーデリケ：また、あなただってお行儀が悪いでしょ！でも本当は、給金をもらって仕えている人たちに敬意を表わすなんて、私たち慣れていないの。
エミーリエ：そう、やれやれ。そんな躾、私たち全然知らないの。[2]

（『クリスマスの贈り物』５場）

おませな三姉妹は下女をからかい、口答えする。そこへ母親が戻り、事情を聴く。下女には立ち聞きしたことを諭し、姉達の振舞いや言葉を戒める。

フィリベルト夫人（...）―（娘に対して）もう一回言いますよ！これからは賢くなって、いかに悪い仲間が良い躾をだめにしてしまうか、今回のことから学ぶんですよ。[3]

（『クリスマスの贈り物』７場）

『いい気味』では、ユルヒェンがおやつの用意をするために格子棚の奥に入り、鼻歌まじりでナッツを味見して悦に入る。そこを弟フリッツェに立ち聞きされてしまう。弟はいたずらで格子戸の閂をぬいてしまい、姉は中に閉じ込められる。

フリッツェ：ほら、つかまえたぞ！―召使、先生、フン、姉さんはきっと、ぼくがさっき聞かなくちゃならなかったお行儀の例を教えてやろうというんでしょう。
ユルヒェン：フリッツェ、何というばかなことを。開けてちょうだい！
フリッツェ：とんでもない！そんな賢い先生はもう書斎に閉じこもって座っていてもらわないと。缶の中味を邪魔されずに調べられるようにね。
（中略）
フリッツェ：（姉のまねをして歌う）うわ、何て甘いんだろう。おいしい！
１個ー，２個ー，３個ー，４個。[4]

（『いい気味』５場）

戸棚に閉じ込められたユルヒェンは泣きながら扉を開けるように訴える。フリッツェの友人４人は笑ってやじを飛ばす。フリッツェは大道芸人の調子でステッキを持って歌い、時々戸棚を叩いてからかうといった具合である。いたずらの場が劇の頂点である。

劇の転換は、父親が帰宅した場面である。子ども達にとって父親の権威は絶対的であることが、ト書きにも表れている。

> アルノルト：鍵を開けないと！（子ども達は皆一緒に大騒ぎをし、フリッツェはポケットの中を探そうとする。一人が叫ぶ。）ケーキだよ！（別の一人が）鍵が先だ！（そのうちに父が入ってくる。子ども達はバラバラに引き下がり、帽子を脱ぎ、非常にうやうやしく脇へ寄る。）[5]　（『いい気味』７場）

父親の前では子どものやましさはお見通しである。

> 父：見事だ。だが、この件について分かっているだろうね。姉さんがここに隠れていたようにおまえも戸棚のその場所へ行くんだ。寝る時間が来るまでここで飲まず食わずでいるんだぞ。
> フリッツェ：ぼくが？一体ぼくが何をしたの？
> 父：まだ聞くのか。いろいろだ。ユルヒェンの過ちはささいな食い意地だ。それは我慢するべきだったね。おまえの過ちは悪癖の名には値しなくても、他人の不幸を喜ぶ気持ちであって、悪い心のあらわれだよ。　（『いい気味』８場）

18世紀後半のドイツの父親の権威がこの場面に端的にあらわれている。

『躾の悪い男の子』（1777）では商人の息子ルートヴィヒは勉強が苦手だが、社交的で絵描きや運動が得意である。父の資産を鼻にかけている。友達が遊びに来たところで、偶然訪れた音楽師の少年が奏でるバイオリンに友達が皆巧みにダンスをする姿に、ルートヴィヒは嫉妬をする。ルートヴィヒはダンスができなかった腹いせに、少年のバイオリンを壊し、お金もお菓子も隠してしまう。社交家であるはずの彼が腕白で自己中心的な面をさらけ出し、ついに父親の堪忍袋の緒が切れてしまう。

> ビュルトベルク：たくさんだ！もういい！おまえの意地悪さが分かったぞ。とっととお前の部屋へ行くんだ！明日家から出ていってもらう。厳しい躾をしてもらって、改心する時間をとってもらおう。[6]　（『躾の悪い男の子』14場）

父親はルートヴィヒを先生の家へ預けて、躾や勉強をみっちり教育してもらおうと考えたのである。

その一方、ビュルトベルクが後見人となって、引き取って一緒に養育する甥ヴィルヘルムは孤児である。彼はルートヴィヒとは対照的に勉強がよく出来て、感謝と気配りを忘れない模範的な男の子として描かれる。ヴィルヘルムはルートヴィヒが宿題をいつも自分に頼ることを注意して、無精者にならないように諭している。

休憩の場面では、女の子達が協力しあってコーヒーの準備をし、姉のロルヒェンがケーキを皿に分けて回る。友達の皿を横取りしようとしたルートヴィヒは姉から叱られる。子ども達の間で、お茶のマナーが披露される。音楽師の少年のバイオリンが壊され、お金も消えた時、ヴィルヘルムは駆け寄って、感動的な慰めの言葉をかけている。

> ヴィルヘルム：心配しないで。神様はこんなささいなことよりももっと多くをまた与えてくださいますよ。君と君のお父さんにはパンが必要だ。ぼくにはたくさんあるけど、養うべきお父さんがいない。[7]
>
> （『躾の悪い男の子』10場）

このように子どもだけの場面であっても、マナーを教えあったり、注意する姿が描かれている。啓蒙時代初期のザクセン類型喜劇では、悪玉善玉が描かれて、悪玉の人物は嘲笑を受けて幕となっていた。しかしながら、ヴァイセの児童演劇では、腕白少年の悪さは父親によって懲らしめられるが、その後、躾や教育の可能性が示唆されて、子どもの未来が予感される。パーペは、ヴァイセは「レッシングに直接倣って、嘲笑は悪徳を矯正できるという概念を取り消している」と説明する。[8] レッシングは1767年８月７日、『ハンブルク演劇論』第29号で、笑いの効用について述べていた。「喜劇は笑いによって人間を矯正する。嘲笑によってではない。喜劇が笑いの対象とする欠点を矯正したり、滑稽な欠点を持っている人々を矯正するのではなく、真の効用は笑いそのものにある。滑稽なものに気づかせるその能力を訓練することにある」[9] というのだ。

『クリスマスの贈り物』（1776）では、ドルヒェンはもらった帽子をかぶって鏡に映った自分を見て大人になったように感じている。彼女は姉や妹に対して、また下男、下女に対しても背伸びをしてみせる。『誕生日』（1775）ではルートヴィヒが誕生日の贈り物に剣をもらう。貴族の息子は一人前の騎士になった証として剣をもらうことになる。彼は急に背伸びをして、態度も大きくなり、姉や近所の子ども達に剣先をあてて、脅かそうと悪ふざけの態度をとる。危険を察知した姉と父のはからいで、刃物ではなく羽をはめこんだ飾りの剣にすり替えて、ルートヴィヒのいたずらを未然に防ぐ。

『兄妹愛』（1776）では軍人の家の３人の子ども達のけなげなかばい合いが描かれる。弟カールは父の書斎にしのび入り、ピストルを手にとって遊んでいた時に、誤って弾を撃ってしまう。妹ユーリエが傍らに倒れていた。カールは青ざめて兄ヴィルヘルムに助けを求めるが、恐怖のあまり倒れてしまう。銃声を聞いた父はいたずらに怒り、家へ戻るが、ヴィルヘルムは自分が二人を撃ったと嘘を言い、弟をかばおうとする。目を覚ますや弟は、撃ったのは自分であると申し出、兄弟はかばい合う。父の怒りがおさまらないところへ爆発音に驚いた軍医がかけつけ、ユーリエの手当てをした。軍医は短気な父親を静め、子ども達の麗しい思いやりを称えている。

> エーベルハルト：こんな子どもは見たことがありません。少佐殿、感動しませんか。私にはわかる、二人のうちのどちらかです。でもどちらももう一人の罪、死刑をかぶろうとしている。これは友情であり、寛容です…。強い魂はそんなことはしませんとも―赦しておあげなさい。[10]
>
> （『兄妹愛』４場）

女の子は気絶しただけで、擦過弾ですんだと医者は証言する。ヴァイセの児童演劇では子ども達が危険にさらされても、亡くなる子はいない。

４．健気な子、賢い子、勇敢な子、素直な子、悪い子

ヴァイセの文学を研究した19世紀のミノールによれば､18世紀後半啓蒙時代後期のドイツでも、ルソーの影響で青少年向け文学が多く生まれる機運にあったという。[11]　雑誌「子どもの友」の読者はザクセン地方にとどまらず、ドイツ各地に広がり、外国でもこの雑誌を愛読した人たちがいた。フーレルマンによれば、この雑誌はドイツ各地の授業でも使われていたという。[12]

ヴァイセの児童演劇でよく見られるのは、貴族や商人の子女が大人のように背伸びをして、他のきょうだいや下僕、下女に横柄な態度をとってみせる姿である。しかしながら、そうした子どもと対照的に、片親に育てられながら、自らも小さな仕事をして働いて親を助けようとする健気な子ども達も登場する。

例えば『落ち穂を拾う小さな女の子』（1777）では父親を亡くした幼い娘エミーリエが母とともに知人の家に身を寄せている。苦しい母を楽にさせたい一心で娘は大人が麦を刈り取った後の畑で落ち穂拾いを手伝っていた。管理人は見慣れぬ幼い娘を麦泥棒と勘違いして厳しく叱責する。泣きながら懸命に身の潔白を訴えるところへ、畑の領主の子ども達がやってきて娘の話に耳を傾け、感心する。落ち穂を少しでも多く拾えば、母親と一日でも長く生きられるというのだ。領主の子どもはエミーリエの賢さと健気な姿に心を動かされ、４グロッシェンともっと多くの落ち穂を分け与えようとする。だが、エミーリエはもらうわけにはいかないと言う。領主の子ども

は困っている子に施しをしようとする。

> フランツ：（こっそりと彼女に）君が思っているほどひどくはないよ。ぼくと姉さんはパパにお願いしようと思っている。拾わなくたって落ち穂をあげてくださいとね。[13]
>
> （『落ち穂を拾う小さな女の子』８場）

そこへ領主フォン・ミルデナウがやってきて、エミーリエの身の上を尋ねる。最終場９場では、娘を探しにきた母親のフォン・ビルケンフェルト夫人が登場し、亡き夫の身の上、素性を明かす。先の戦争でミルデナウの命を救ってくれたのが、プロイセンの騎兵大尉フォン・ビルケンフェルトであったこと、落ち穂を拾っていた女の子はその人物の娘であったことが判明する。領主ミルデナウは今こそ恩返しをすべく、この母子にパンも仕事も住処も用意したいと申し出、感動的なセリフの応酬の後、クライマックスを迎える。ミルデナウはエミーリエのけなげな働きを称えている。

> フォン・ミルデナウ：（...）私の子孫にあっては決して忘れてはならない。この瞬間からこの娘のよい心がけの褒美として生涯パンを取らせてやろう。[14]
>
> （『落ち穂を拾う小さな女の子』９場）

1778年の『別れ』では戦争で出征したフォルティス大尉の上の子ども達３人が、森で野イチゴを摘みながら、自分達の寂しさを慰めあっている。そこへ王子がお忍びで将校を伴って通りかかる。王子は身分を隠して、イチゴ摘みに夢中のエミーリエに話しかける。エミーリエは父は頭に古傷があって病むことがあるのに、お国のために連隊の仕事についていると、涙ながらに話す。16歳の王子は部下となる大尉の子ども達や家庭の様子をさり気なく聞き出していく。そのやりとりから、父親の留守中、子ども達が軍人の父を誇りに思い、無事を案ずる気持ちが読み取れる。エミーリエは無邪気に王子の帽子の中へ摘みたてのイチゴを入れようとする。子どもにとって自分が持つものを他人に施すことが博愛の精神のあらわれである。一兵卒になりすます王子はエミーリエの切実な願いに胸をえぐられる思いがする。

> エミーリエ：そうですとも。王子様には幾千もの涙を流して私たちのお願いや希望をお伝えしたいの。パパがどれくらい病気だったか、まだどれほど体が弱っていて、パパが留守にしたことでどれほど私たちが失ったかをお伝えしたいです。[15]
>
> （『別れ』６場）

王子はお礼に父王からもらった青銅の小箱を与える。さらに王子は弟カールと兵隊についての問答をする。カールは、王子は志願兵として野戦に参加しているとの噂話をして、志願兵„Volontair“とは何かを教えてもらう。兵隊の仕事に積極的な関心を示すカールの存在はお伴の将校を大いに喜ばせる。さらに王子は父王からもらったお小遣いの手形をカールに与えて立ち去る。

王子の取り計らいで素直で健気なこのきょうだいのもとへ父親フォルティスが戻り、大団円となる。父王の措置と王子からもらった贈り物に対して両親は感謝をし、エミーリエも王子をほろ苦い思いで回想する。

『気高い心、卑しい心』（1777）では、富裕な荘園領主の子どもカールとエミーリエと庭師の息子トッフェルの人格が極めて対比的に描かれている。領主は社会階層の異なる子ども同士が仲良くして子ども達の共同体で遊び学ぶことに理解を示すが、母親は子ども達が下の階級の子と交流して躾が悪くなったら困ると考えている。この劇では社会階層の問題がたびたび両親の間で取りざたされている。

トッフェルの父親は庭師で、領主の庭園で雇われている身である。トッフェルは、腕白なカールから七面鳥の雛をさおの下敷きにして台無しにしたと打ち明けられると、自分も一緒に苦しみたい、と同情する。ヴァイセの劇においては、善玉、悪玉の描写が子どもにも分かるように強調されており、時には過剰な程で、不自然さも感じられることがある。姉のエミーリエも我儘で意地悪な女の子に描かれている。ヴァイセは、頻繁にエミーリエという名前の人物を劇に使っている。一方、庭師の息子は気高いセリフを語り、人の善い男の子として描かれている。七面鳥の雛を犠牲にしたことで、カールには飼い主であるトッフェルの両親に対して良心の呵責がある。

領主の子ども達が水辺で遊んでいて池に落ちておぼれそうになった時、トッフェルは勇敢に水の中へ入って二人を救出する。この出来事を機に、子ども達のトッフェルに対する態度が一変する。

> カール：（トッフェルが入ってきたのに気がつくと、彼の方へかけ寄り、首にしがみつく。）
> エミーリエ：（トッフェルの方へ近づき、彼の手をとる）私もあなたに感謝しなくては。あなたが私を水から引き揚げてくれた時は、恐ろしさのあまり、何も見えなかったわ。
> （中略）
> カール：違う、違う、お母さん。悪いのはぼくの方さ。すべての悪さの張本人はぼくだったんだ。[16]　（『気高い心、卑しい心』13場）

身分の低い庭師の息子の方が、貴族の子達よりも気高く勇敢に振舞っており、結末で領主の子ども達が偏見と傲慢さを詫びる姿が、子どもの素直さを印象づけている。

『大金持ちの両親のよい子達』（1779）は商人の父が信用していた友人から期日になってもお金が届かず、不渡りを出し財産が差し押さえられたという深刻な設定である。母親はすでに他界し、15歳の娘ロットヒェン、14歳の息子ハインリヒを良き友達のようにして、父親は負債を抱える苦しい思いを打ち明けている。それに対して子ども達は、父の嘆きに耳を傾け、健気に協力を申し出る。

ハインリヒ：ええ、パパが苦しいのだから僕たちも一緒に苦しむよ。だってパパは自分の幸運を僕たちと分け合ってきたではありませんか。[17]

（『大金持ちの両親のよい子達』Ⅰ幕２場）

ロットヒェン：パパのために働けというのなら、喜んで昼も夜も働きます。[18]

（『大金持ちの両親のよい子達』Ⅰ幕３場）

ロットヒェン：（略）この宝石でパパの現在の不運から自由の身になれないかしら。―ああ、パパ―その宝石はもらいません…[19]　（Ⅰ幕３場）

とりわけロットヒェンには才覚があり、負債を自分が肩代わりして父を窮地から救おうと行動に出る。彼女は父と疎遠な商人ハーティヒを訪ね、母の形見である宝石類を担保にお金を工面しようとする。切々と父の危機を訴え、融資を懇願するのである。娘はハーティヒと大人顔負けの交渉をする。弟も彼を訪ねて父の負債の罪を自分が償うと申し出る。

ハインリヒ：（…）ここにいたの、ロットヒェン。さあ、来て！ハーティヒさんにぼくをパパの代わりに牢屋へ入れてとお願いして。パパは働いてハーティヒさんを満足させるいくらかのお金を稼げるけど、僕はそうじゃない。
ロットヒェン：（ハーティヒの右手をつかむ。その手は彼女の涙で濡れる。）
そうよ！ハーティヒさんがこの子をまた返してくださるわよ―そうじゃありませんか、ハーティヒさん。払ってくださいますか？―（ハーティヒは右手を見つめる。ロットヒェンはそれに気づく）お許しください、ハーティヒさん―うれし涙です―希望の涙です。あなたは私たちの願いを聞いてくださるでしょう―私は涙を抑えることができないわ。
ハーティヒ：君、君。君がうちの娘だったらねえ。[20]　（Ⅱ幕９場）

一番手堅く、冷たそうな商人が負債者の子ども達の姿に感動して善意で融資に応じるのである。催涙を演出する感動的なセリフの応酬は、ヴァイセの感動喜劇に定番の手法である。父親が保証

人から届いた手紙を持参し、それには、送金したが郵便事情で到着が遅れる旨書かれていた。クライマックスに手紙が使われることも啓蒙喜劇に定番の手法である。

『小さな家族の仲違い、あるいはよい子達が時には両親をよくする』（1778）では、お城に住み、広大な庭園を持つ騎士領主フォン・グルントマン家の子ども達アーデルアイドとアドルフと、近くに住む牧師の子ども達トーマスとドルヒェンとの交流が描かれる。領主の広大な庭園の一角に白樺の林があり、そのあたりを英国庭園にする計画が進んでいた。牧師は領主からその木の管理をまかされていたが、木が背景の丘を望む眺望を妨げているとして、牧師はある木を切り倒してしまう。そのことで領主と牧師が仲違いをし、互いに子ども達のつきあいも禁じることになった。そんな折、トーマスが籠に入ったリスをアーデルアイドへの贈り物として持ってくる。弟アドルフは姉が父の言いつけに反して、牧師の家の兄妹と親しくするのを揶揄し、リスと遊ぶ姿を羨む。アドルフは貴族の家柄を誇りにするが、牧師の子どもを見下す横柄な面が見られる。姉のセリフからは、身分・家柄にとらわれない啓蒙的な考えが見て取れる。

> アーデルアイド：みすぼらしい牧師さんの子ども達よ。二人が誰かではなく、どういう子達かが大事なの。とすると、貴族のお坊ちゃんやお嬢さんよりも羊飼いの男の子やガチョウ番の女の子の方が私、好きだわ、いい子達ならばね。[21]
>
> （３場）

アドルフは父の言いつけをそのままトーマスに繰り返す。この庭の敷居を越えたり、屋敷に足を踏み入れてはいけないと。寛容なトーマスは反論する。

> トーマス：ぼくに禁止するの？ユンカーさん。ぼくが何か気に入らないことをしたというの？ぼくは君のことがとても好きだと思っているし、ぼくの友情は…[22]　（３場）

この劇ではアーデルアイドとトーマスの友情が気高く描かれ、身分や家柄にとらわれない寛容な姿が弟や妹、両家の父親を感化していく。

父と牧師の不和を解決しようと、アーデルアイドはひそかに牧師を訪ねて、白樺の管理料として自分の小遣いから150ターラーを渡してきた。そのことから、グルントマンは親の問題を娘が解決しようとする様を、「まるで危険な弁護士ではないか」[23]と一度は諌める。しかしながら娘とトーマス、ドルヒェンの友情を知って、牧師の子ども達とつきあってはいけない、などと了見の狭い考えにとらわれていた自分を恥じてしまう。結末に、牧師からアーデルアイドにお詫びの手紙が渡され、不和の原因が解決に向かう。

グルントマン：今日はおまえたちからたくさん学んだよ。おまえたちの例から、できのよい子ども達自身が両親にいいお手本になるとね。[24]　（9場）

クリスチャン・フェーリクス・ヴァイセの児童演劇（雑誌「子どもの友」掲載）

	作品タイトル	形　式	掲載年
1	Geburthstag	ein kleines Lustspiel　1幕	1775
2	Das Weihnachtsgeschenke	ein kleines Lustspiel　1幕	1776
3	Die Geschwisterliebe	ein Schauspiel für Kinder　1幕	1776
4	Die Milchschwester	ein Schauspiel für Kinder　1幕	1776
5	Die Schadenfreude	ein kleines Schauspiel für Kinder mit Liederchen　1幕	1776
6	Der ungezogene Knabe	ein Lustspiel für Kinder　1幕	1777
7	Edelmuth in Niedrigkeit	ein Schauspiel für Kinder　1幕	1777
8	Die kleine Aehrenleserinn	ein Lustspiel für Kinder　1幕	1777
9	Wer dem andern eine Grube gräbt, fällt oft selbst hinein; oder die blinde Ruh	ein Lustspiel für Kinder　1幕	1777
10	Die Schlittenfarth	ein Kinderspiel　2幕	1778
11	Der Abschied	ein Schauspiel für Kinder　1幕	1778
12	Ein kleiner Familienzwist, oder gute Kinder machen bisweilen auch gute Aeltern	ein Schauspiel für Kinder　1幕	1778
13	Die Ueberraschung	ein Lustspiel für Kinder　1幕	1778
14	Versprechen muß man halten. Oder: Ein guter Mensch macht andere gute Menschen	ein Lustspiel für Kinder　1幕	1779
15	Die Friedensfeyer, oder die unvermutete Wiederkunft	ein Lustspiel für Kinder　2幕	1779
16	Die natürliche Zauberey, oder das böse Gewissen	ein Lustspiel für Kinder　1幕	1779
17	Das junge Modefrauenzimmer	ein Schauspiel für Kinder　1幕	1779
18	Gute Kinder der Aeltern größter Reichtum	ein Schauspiel für Kinder　2幕	1779
19	Ein gutes Herz macht manchen Fehler gut	ein Lustspiel　1幕	1780
20	Die Freude, oder: Das Vogelschießen	ein Lustspiel　2幕	1780
21	Die Feuersbrunst, oder Gute Freunde in der Roth das größte Glück	ein Schauspiel　1幕	1780
22	Das Windspiel oder: Die Rache	ein Schauspiel für Kinder　2幕	1781
23	Die jungen Spieler, oder: Böse Gesellschaften verderben Gute Sitten	ein Lustspiel für junge Leute　1幕	1781
24	Das Denkmal in Arkadien. Ein ländliches Schauspiel für die Tugend	mit untermischten Gesängen　1幕	1782

５．父親像、母親像

ヴァイセの児童演劇の人物構成の要は、子ども達と並んで父親である。父親の身分職業は、貴族や富裕商人、軍人、豪農などであることが多い。普通の庶民の家が舞台というわけではない。大抵の場合、ドラマの最初の場面に父親と子どもが登場し、仕事や用事で父親はいったん舞台から退場する。父親の不在中に子ども達の世界が展開し、小さな騒動が起きて子どもが危機に陥る。最後に父親が帰ってきて、子ども達の問題を解決へ導くという設定が多い。

喜劇『誕生日』（1775）では富裕な貴族フォン・ドルヴァル家の長男ルートビッヒが誕生日を迎え、父親から一人前になった騎士の証として剣を贈られる。ルートヴィヒはまじめに礼儀正しく振舞うことを誓い、今後は卑しい男の子達とはつきあわない、などと言う。ルートヴィヒは、卑しい子達とは剣や羽飾りのついた帽子を身に着けることができない下品な男の子達のことだ、と答えるが、父は剣を持つ者の行ないが問われると戒める。

> ドルヴァル：卑しい考えをしたり、卑劣な振舞いをしたり、両親のいうことを聞かなかったり、他の人に威張ったり、乱暴だったり、不作法であれば、卑劣な男の子だ。そうであればたくさんいるユンカーは卑しい男の子だ。たくさんいる身分の卑しい男の子のほうがユンカーにふさわしくなってしまう。[25]
>
> （『誕生日』２場）

> ドルヴァル：だが優位に立つ階級も世の期待に反して世を欺くほどに没落してしまうんだ。[26]
>
> （『誕生日』２場）

ルートヴィヒは剣を下げて騎士気取りになり、剣を振り回し、姉のフリーデリケを威嚇する。誕生日祝いにやってきたよその家の子ども達はうやうやしく振舞うが、ルートヴィヒは自分が貴族だと自慢して偉ぶる。賢い友達が巧みに切り返す。

> ブルーメナウ（兄）：フーン。フォン・ドルヴァルさん。ぼく達とつきあうのに自分のことを高貴だと考えているなら、どうしてぼく達を招待したんですか。ぼく達はそんな名誉はお願いしなかったし、あなたにいじめられる名誉なんてたまりませんよ。[27]
>
> （『誕生日』８場）

市民階級の賢いお客達は、招待された者のマナーを心得ているが、ルートヴィヒの態度は不作法であつかましい。両者の差は対照的である。ルートヴィヒは剣を持って部屋へ飛び込んでくるが、

子ども達はあちらこちらの隅へ逃げてしまう。だが剣を抜くや、中味がおもちゃの羽根だと分かると、子ども達は笑い、ルートヴィヒは恥かしさのあまり泣き出す。そこへ父が戻り、息子が他人にケガをさせないように確かめたかったと語るのである。

> フォン・ドルヴァル：（ルートヴィヒに向かって）おまえは誕生日だが、今日は一歩も部屋から出てはいかんぞ。おまえがまだ剣を下げるのにふさわしくない限りは。―おまえはそのことをよく考えてみるんだ。[28]　（18場）

同様に『いい気味』における父親も、はめをはずした息子をお仕置きとして寝る時間になるまで格子棚の中に閉じ込めた。

『しつけの悪い男の子』（1777）の父親は、町でも人望のある富裕な人物ビュルトベルクである。10歳過ぎの息子ルートヴィヒと娘ロルヒェンの他に孤児となった甥ヴィルヘルムもひき取って、我が子同様に養育している。子ども達には不自由もなく、家庭教師を雇って教育熱心である。息子が音楽師の少年に悪さをすると、父親が戻ってきてその理由を問いただす。バイオリンを弾いて働く少年の苦労とその子の老父を思い、町の養老院を紹介する。

当時は身分制の社会であったとはいえ、貴族階級の父が階級の優位性が崩れる不安を子ども達に吐露する場面がある。それは『誕生日』、『気高い心、卑しい心』、『小さな家族の仲違い、あるいはよい子達が時には両親をよくする』において見られる。[29] 作者のヴァイセは市民階級の出であるが、児童演劇では貴族階級の家庭の様子を好んで描いている。彼自身、ライプツィヒ大学卒業後、ガイヤースベルク伯爵やシュトゥーベンベルク伯爵の家庭教師をやって、貴族階級の子弟と生活をともにした経験がある。市民階級の読者であっても、富裕な人々の暮らしを憧れを持って作品で読んでみたかったのではないだろうか。ヴァイセは「上流階級の家の子も貧しい家の子も一緒に遊ぶべきだ」と考えていた、とフーレルマンは指摘する。[30]

『兄妹愛』における軍人の父親は気が短く、激高しやすいやや極端な人物像として描かれている。『大金持ちの両親のよい子達』では、人が善すぎて他人の負債を抱えそうになった父親が登場する。それ以外の父親には、よその家の子どもにも施しをする博愛精神が認められる。家庭や領地や庭園という共同体の中で、困っている人たちに食べ物やお金を分け与えている。[31] また、父親がたとえ頑固な人物として描かれていても、優れた子どもから教えられる場面を描いた話がある。『誕生日』『兄妹愛』『小さな家族の仲違い』『大金持ちの両親のよい子達』などが代表例である。

その一方、母親の描写は父親に比べてアクセントが弱い傾向にある。死別したり、セリフが少なかったり、母親が登場しない劇もある。『クリスマスの贈り物』や『乳姉妹』では母親が最後

に戻って、娘達の躾のためにお説教をする。『落ち穂拾いをする小さな女の子』では、健気な働き者の小さな娘エミーリエと未亡人が良きお手本として描かれる。ここでの未亡人は、新天地で再出発をしたいと願う聡明な人物となっている。『気高い心、卑しい心』における貴族の母親では、階級における優越感がことさら強調され、偏見にとらわれている。

6．小道具

ヴァイセの児童演劇ではどのような小道具が使われるのか。それは、演出家の手腕でも変わるだろうが、ここでは、ヴァイセのテクストから読み取れる小道具を考えてみよう。

子ども達は大人の振舞いを真似したがる。『クリスマスの贈り物』ではクリスマスでもらった帽子を新年にかぶって鏡に見入っている女の子が登場する。『乳姉妹』では妹が見ている鏡や、広間に置かれたピアノが最初の小道具である。姉は庭でチョウチョウを追いかけ、２羽のガチョウを捕まえて連れてくる。その日招待していた、かつての乳母とその子ども達に渡すプレゼントの帽子や絹の手袋、色とりどりの石がはめこまれた銀の十字架が用意されている。

『誕生日』ではプレゼントとしての騎士の剣、剣帯が要となり、羽根飾り付きの帽子も出てくる。また、おもちゃの剣も用意されている。客間には子ども達用に、テーブルと椅子、お茶とお菓子のセットなどが配置される。『兄妹愛』では書斎が舞台となり、机、書棚、本が背景となり、ピストル一丁が使われる。

『気高い心と卑しい心』では、野外のセットが考えられる。遊歩庭園が場所になっていることから、書割が用意される。木や池の仕掛けもあり得る。池から救い出されたカールがまとう毛皮の化粧着が卜書きにある。

『躾の悪い男の子』では、教科書、ペン、紙、お絵描きセット、机、椅子、応接セット、コーヒー、ケーキ、お菓子、皿、スプーン、フォーク、女の子達のドレスなど、こまごました小道具が想定されている。興味深いのは、舞台の広間に続く小部屋が用意されており、ルートヴィヒがそこに隠れて様子を伺うのに使われていることである。ヴァイセの喜劇『アマーリア』でも宿屋の客間が舞台で、そこに続く小部屋が設定されていた。そこは秘密の隠れ場所であり、人物が独白したり、広間での会話を盗み聞きする際に使われていた。1770年代の児童演劇でもおなじ手法でこの小部屋が広間の隣に用意されている。『そりの遠出』でも舞台は大きな部屋となっているが、やはりそこに続く小部屋があり、家庭教師から逃れたフランツが隠れる場所に使っていた。『大金持ちの両親のよい子達』では第Ⅰ幕の舞台が主人公の父親の２階の部屋で、第Ⅱ幕は商人ハーティヒの家の書斎となっている。ハーティヒの書斎でも、やはり奥に小部屋が設定されており、一人で冷静に考えたり、来客から距離をとって独白する場面で使われている。

『小さな家族の仲違い』では、白樺の林が一角にある庭園が舞台で、背景に東屋もある。トーマスの贈り物として籠とリスが使われている。解決の場に届けられる牧師からの手紙も啓蒙喜劇

では定番の手法である。

結語

1770年代に刊行された「子どもの友」における代表的な児童演劇作品に限定してみると、幼い子どもが退屈せずに理解できるように、短い一幕物が多い。これらは基本的に三統一の法則に従っているが、『大金持ちの両親のよい子達』のように、第Ⅰ幕と第Ⅱ幕では演ずる場所が交替する劇もある。

登場人物は、父母と子ども２人～５人で最少の家族構成をとり、祖父母は登場しない。さらに下僕か下女が１人、よその家の子どもが２人～数人加わるのが平均的である。ヴァイセの1760年代に書かれた『策略には策略を』は劇構成が全５幕43場で、いくつものエピソードが複雑に絡んでいる。登場人物も多く、主人公の下女と訪問者の下僕も加わる。

ストーリー展開に関しては、冒頭部では父や母は子どもと一緒に過ごしているが、用事で出かけて、筋の後半に戻ってくる設定である。親や大人の不在中に子どもの世界が展開する仕組みである。大人向けの喜劇と比較すると、児童演劇ではエピソードが単純である。ヴァイセは大人向けの喜劇で成功した、広間と隣接する小部屋の舞台設定を児童演劇でも応用している。『いい気味』や『躾の悪い男の子』では歌と音楽の要素が取り入れられ、ト書きも具体的に指示されている。これらはヴァイセが舞台上演を強く意識したことに他ならないだろう。

かすり傷を負ったり、手をくじいたりした子どもはいるが、亡くなった子どもはいない。子ども達の姿を描き、子どもの成長を願って親や大人が子どもに愛情を注いでいる光景を描くことが、ヴァイセの児童演劇の基本である。ヴァイセは喜劇の手法を児童演劇にも応用して本領を発揮し、時流にかなった感動喜劇の要素を取り込んだことで、子どものみならず大人にも共感して受け入れられる劇を量産できたのではないか。

註

[1] 本稿は、科学研究費基盤研究（C）（令和２年度～４年度）「啓蒙時代後期における喜劇の作劇法と受容の研究　―レッシングとヴァイセの比較」（課題番号20K00498）による研究成果の一部である。

[2] Weiße, Christian Felix: *Das Weihnachtsgeschenke*. Ein kleines Lustspiel. In: Der Kinderfreund. Ein Wochenblatt. Erster Theil. Leipzig: bey Siegfried Lebrecht Crusius 1776, S. 84.

[3] Weiße: a.a.O. S. 93.

[4] Weiße: *Die Schadenfreude*. Ein kleines Lustspiel für Kinder mit Liedern. In: Der Kinderfreund. Ein Wochenblatt. Fünfter Theil 1777, S. 140.

[5] Weiße: a.a.O. S. 149.

[6] Weiße: a.a.O. S. 127.

[7] Weiße: a.a.O. S. 127.

[8] Pape, Walter: Das literarische Kinderbuch. Studien zur Entstehung und Typologie. Berlin/ New York: de Gruyter 1981, S. 221.

[9] Lessing, Gotthold Ephraim: *Hamburgische Dramaturgie*. 29. Stück. In: Gotthold Ephraim Lessing Werke und Briefe. Bd. 6. Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker Verlag 1985, S. 323.

[10] Weiße: *Die Geschwisterliebe*, ein Schauspiel für Kinder. In: Der Kinderfreund. Ein Wochenblatt. Dritter Theil. 1776, S. 19–20.

[11] Minor, Jakob: Christian Felix Weiße und seine Beziehung zur deutschen Literatur des achtzehnten Jahrhunderts. Innsbruck: Verlag der Wagnerschen Universitäts-Buchhandlung 1880, S. 344.

[12] Hurrelmann, Bettina: Jugendliteratur und Bürgerlichkeit. Soziale Erziehung in der Jugendliteratur der Aufklärung am Beispiel von Christian Felix Weißes ‚Kinderfreund' 1776–1782. Paderborn: Ferdinand Schöningh 1974, S. 172–174. この雑誌を購入したのは、市民階級85.7%、貴族階級8.5%、下層階級5.8%であったという。中産階級の読者に支持された雑誌であったことになる。

[13] Weiße: *Die kleine Aehrenleserinn*. Ein Lustspiel für Kinder. Achter Theil 1777, S. 174.

[14] Weiße: a.a.O. S. 194.

[15] Weiße: *Der Abschied*. Ein Schauspiel für Kinder in einem Aufzuge. In: Der Kinderfreund. Ein Wochenblatt Eilfter Theil 1778, S. 158.

[16] Weiße: *Edelmuth in Niedrigkeit*, ein Schauspiel für Kinder in einem Aufzuge. In: Der Kinderfreund. Ein Wochenblatt. Siebender Theil 1777, S. 190.

[17] Weiße: *Gute Kinder der Aeltern größter Reichtum*. Ein Schauspiel für Kinder in zwey Aufzügen. In: Der Kinderfreund. Ein Wochenblatt. Achtzehnter Theil 1779, S. 120.

[18] Weiße: a.a.O. S. 123.

[19] Weiße: a.a.O. S. 129.

[20] Weiße: a.a.O. S. 180.

[21] Weiße: *Ein kleiner Familienzwist, oder gute Kinder machen bisweilen auch gute Aeltern*. In: Der Kinderfreund. Ein Wochenblatt. Zwölfter Theil 1778, S. 93.

[22] Weiße: a.a.O. S. 100.

[23] Weiße: a.a.O. S. 144.

[24] Weiße: a.a.O. S. 154.

[25] Weiße: *Der Geburthstag*, ein kleines Lustspiel für Kinder, in einem Aufzuge. In: Der Kinderfreund. Ein Wochenblatt. Erster Theil 1775, S. 155.

[26] Weiße: a.a.O. S. 156.

[27] Weiße: a a.O. S. 171.

[28] Weiße: a.a.O. S. 183.

[29] Hurrelmann: Vgl. S. 121. フーレルマンはヴァイセは「子どもの友」の中に出てくる社会問題や階級の問題について子どもたちに問いかけるのを避けていたとする。しかしながら、ここに見られる児童演劇では、親の考えに反して、身分の違う子ども同士が寛容な心で友情をはぐくむ例が見られ、子ども達の世界観の方が時には啓蒙的であると言えるのではないか。

[30] Hurrelmann: Ebenda. S. 117. 当時の親は子どもに雑誌「子どもの友」を読ませて、賢くなってほしいと思っていた、とフーレルマンは述べている。

[31] 小林英起子：「C. F. ヴァイセの児童演劇にみる博愛精神と子どもの理想郷の世界」広島大学大学院文学研究科論集第79巻（2019）, S. 52.

Die Dramentechnik in den Kinderschauspielen Christian Felix Weißes

Ekiko KOBAYASHI

Key Words: Christian Felix Weiße, Kinderschauspiel, Philanthropie, das rührende Lustspiel

Christian Felix Weiße war ein populärer Komödienschreiber in den 1750er und 1760er Jahren. Nach der Geburt seiner Tochter wandte er sich der Kinderliteratur zu und verfasste den „Kinderfreund“ (1775-1782). Er schrieb dafür 24 Kinderspiele. In diesem Beitrag möchte ich seine Dramentechnik in den Kinderspielen „Der Geburthtag“, „Das Weihnachtsgeschenk“, „Die Schadenfreude“, „Die kleine Aehrenleserinn“, „Der Abschied“, „Ein kleiner Familienzwist, oder gute Kinder machen bisweilen gute Aeltern“, „Gute Kinder der Aeltern größter Reichtum“ u.a. analysieren.

Minor war ein Pionier in der Weiße-Forschung im 19. Jahrhundert und erkannte den Sinn des „Kinderfreund“ als großen Erfolg. Hurrelmann untersucht den „Kinderfreund“ im sozialen und pädagogischen Kontext. Pape weist darauf hin, dass Weiße nicht immer in der Kindersprache schreibe, die Kinder ihrem Stand unangemessen redeten und handelten und sein Drama moralisch verbessern wolle.

In seinen Kinderspielen wird das Alltagsleben der Kinder in reichen adeligen und reichen bürgerlichen Familien bevorzugt dargestellt. Die meisten sind Einakter, die aus wenigen Auftritten bestehen. Für Kinder ca. über vierzehn gibt es Zweiakter mit komplizierten Hintergründen. Die meisten beruhen auf der Dreiregeleinheit. Die Orte sind oft ein großer Saal, die Studierstube des Vaters, der Garten, die Promenade, im Wald u.a.m. Der Saal mit einem Kabinett wird wie in „Amalia“ häufig gebraucht, da man dort horchen oder auch einen Monolog äußern kann. Die Personen sind der Vater, die Mutter und zwei bis fünf Kinder je Familie, Diener oder Dienerin, einige Freunde. Die Großeltern treten kaum auf. Die selben Namen wie Emilie, Julchen, Dorchen, Ludwig u.a. werden gebraucht. In der Abwesenheit des Vaters wird eine Episode entwickelt. Die Kinder geraten dann in einen Konflikt. Zum Schluss kommt der Vater zurück und rettet sie.

Weiße verwendete Lieder und Musik effektvoll in „Die Schadenfreude“ und in „Der ungezogene Knabe“ u.a., damit kleine Kinder ohne Angst und mit Spaß die Tadelsszene erleben können. Es geht um Erziehung und Disziplin, Bubenstreiche und Züchtigen der Kinder. Kein Kind stirbt in Weißes Kinderwelt.

Die wohlhabenden Väter helfen aus Philanthropie den Kindern der armen Familien. Der Vater zeigt große Autorität in Weißes Kinderwelt. Im Vergleich zur Vaterfigur schilderte er die Mütter mit einem schwachen Nachdruck. Die toleranten Kinder klären die Vorurteile der Eltern auf. Er zeigte Toleranz gegenüber Vorurteilen sowie Klassen aufhebende Tendenz. Es ist bemerkenswert, dass die klugen oder armen Kinder selbstbewusst wie Erwachsene sprechen. Nicht mit Intrigen sondern mit rührenden Reden erweitert sich die Handlung. Weißes Kinderschauspiele zeigen die Tendenz des rührenden Lustspiels. Er verwendete dabei seine bisherige dramatische Technik des Komödienschreibens.